

# P. B. シェリーの死を悼む —メアリ・シェリーの「選んだひと」

池 田 景 子

## 1. はじめに

イギリス・ロマン派詩人、P. B. シェリー (P. B. Shelley) は、1812年に思想家ウィリアム・ゴドウィン(William Godwin)の娘、メアリ・ゴドウィン (Mary Godwin) と出会う。そして、シェリーは妻子がいるにも拘わらず、1814年7月にメアリと駆け落ちをする。紆余曲折を経て、1817年暮れにメアリはシェリーと結婚し、メアリ・シェリー (Mary Shelley) となる。(以後、メアリ・シェリーをメアリ、P. B. シェリーをパーシーとする。) だが、1822年7月にメアリはイタリアで夫のパーシーを失う。夫婦仲は最後まで円満であったとは言えないが、両者がお互いに文学的影響を与え合ったのは確かである。また、パーシーの死後、その作品を編纂して世に送り出すことに貢献したのは他でもないメアリである。メアリはパーシーの死を深く悲しみ、その死から1年後の1823年にパーシーを失った悲しみを詩「選んだひと (The Choice)」に託す。以下のセクションでは、メアリの「選んだ人」を翻訳し、詩の内容に関わる背景について注釈を付しておく。

## 2. テクストの全訳

「選んだひと」メアリ・シェリー

私の選んだひと、そのひとは、悲しいかな、私のもとにやってきて行ってしまった。

夏の太陽が放つ赤いきらめきとともに

頭を浴していた深みの中に姿を消した。

私の選んだひと、私の人生、私の希望はいっしょくたに消え去った。

私はさすらい人となって、今や家も探し出せずにいる。

空はアーチ状に広がり、イタリアは墓となった。

けれども、私は巡礼者として幾日間かとどまり、

父親を亡くした我が子に義務の鎖で繋がれている。

私にはこんな信念があるから。

自分はそのひとの伴侶として、受けた愛のお返しを苦しみと忍耐で

返さなければならない、という信念が。あのひとの伴侶となり愛をもらったことで、

若い頃の私を覆っていた暗雲に太陽の光が差し込んだ。

けれど今、私は暗がりに置いてきぼりになった。

光は恐るべき海流の力によって奪われてしまい、

空は真っ暗になって、そんな空に座す星のそばに

ひとつの雲が天上の暗澹たる汚点として残されてしまったかのように。

生きなければならないなら、どうやってその日をやり過ごせばいいのだろう。

なけなしの涙でどうやって朝日と向き合えばいいのだろう、

どうすれば穏やかな夢で眠りと向き合えばいいのだろう。そして、どう喜びを

見出すのだろう。

火のように、月の見えない夜の間に輝きは逃げ去ってしまう。

まずはあなたの名を呼ばせてください。あなたがいなくなって  
あなたの名前が—そうです—私の心を落ち着けて、あなたの愛が私の心を満た  
すから。

おお、優しい聖霊よ、あなたはいつも歌ってくれた

あなたの心が痛むとは何て不運なのか、と。

今は激しい悔恨と返答のない死が

私の心に張られた琴線に触れて、その心が吐き出す吐息は  
興奮して熱烈だが、はっきり聞き取れる口調で  
報われることのない愛の物語を語る。

それは怒りの物語ではなかった。地上でまとうあなたの衣が

その魂の稀有なる美しさをくるんでいたときも

あらゆる怒りがやさしい抱擁と涙でなだめられ

和らげられた精神に語りかけたのだ

そこで語られるのは、冷たく無視をすること。つまり、やさしいあなたの心が  
犠牲を払ってくれたのに、そこから目を逸らせて盲目にも壊してしまうこと。

私の心はあなたのもの。だけど、貝はその芯から閉じてしまい、尖るほど  
突き通せないように思われる。歯をむきだした<みじめ>がその殻をふたつに

割ったら

貝は口をあぐり開けて横たわり、もう二度とひとつにはなれない。

わたしを許して！あなたの愛が

やさしい改悛とこれまでにないほど忠実な後悔の露の上に、降りてきますように。

見覚えのない姿であなたは降りてくる。どうやって

愛は激しい悔恨をなだめられようか。今まさにそうしているのに！

この悔恨と愛、そして、わたしたちが

同じ希望と恐れを共有した年月、

また、わたしたちが最良のパートナーであったことを心に掛けて、私は思い切って  
あなたの神聖な名前を恐れずに呼ぶ。

そして、それゆえにあなたに懇願をする、わが友、わが心よ、  
新しい住まいであなたが担う役目は、メアリの重い鎖（痛み）を和らげること  
です。

なぜならメアリは次から次へと重い鎖を編んでいるのだから。

そして、あなた、見慣れぬ星よ。聞くところでは、あなたは私の誕生日に東の  
地平線上へ昇り、

やさしい影響力を地上に降り注いでいたそうですね。

だから私は生意気にも偉大な両親から生まれて、自分の友も幸運だと  
自慢していた。日没のあなたの光が失われるまでは！

そして、あなたは一計り知れない！その定めが  
〈みじめ〉という恐ろしい嵐をどっと引き起こしたから。

ここにとどまり、こんな孤独感に頼らせてください。

ここにあるキンバイカが影を投げかけた川と栗の木立に。

私をここから引き離さないで。息絶えるまでここに住まわせてください。

私を養女にした国、私の国、イタリアに。

私は最初に幸せな母親としてイタリアの太陽を目にした。

その空の下、喜びのひとときが尽きた。

私の初めての可愛い娘！顔はあの人に似ていた。

あの娘はヴェニスに近い、荒涼としたリドで葬られた。

だけど、私の最愛の長男が、

そばを離れようとしなかった。その時が今から振り返って最近の、最も喜びに  
満ちたときだった。

イギリスの故郷がこの天使に生を授けてくれたのだ。

王宮に近いところ、草で覆われた地面に

そびえ立つ木々が影を差している。私の故郷イングランドに生える木々が。

それから、わたしたちの仲間が速やかに海を渡って

アルプス山脈のそばに住んでいた。あるいは、静かに眠って  
波に揺られていた。その波の上を私たちの船が進んでいったのだ。  
あの子は、父親の存在を感じながら、私の胸の中であやされていた。  
レマン湖の水が激しい動乱を示して揺れると  
あの子は美しい手足をセルキオ川の流れに浸たして  
イタリアの稲妻がきらめくのをしかと見届けていた。  
この子が子どもじみた声で騒々しい呼び声を立てると  
エステンセ城の壁にこだまを作った。  
また、ポンペイのローマ市場を行き来すると  
この子はローマの宮殿にある、神をかたどった像や聖人を描いた石碑に特有の  
優美さを  
こどもらしい驚嘆をこめてじっと眺めていた。  
この子の頬には  
死の気配なんてなかった。それなのに影も挟まず  
いかめしい顔をした死が近づいてきた。そして、あの子は死からの接吻を受けた。  
すると、あの子の輝くような手足は生命の暖かさで輝いていたのに  
死の氷のような腕があの子の手足に抱きついたのだ。  
死が略奪していったあの子の身体はローマの地の下にばら撒かれた。  
そのローマに咲く花はあの子が眠る墓の近くで黒い地面に星をちりばめるよう  
に生えていた。  
空気と植物は死を免れない部分を受け取り  
あの子の精神はその母の心のなかで鼓動する。  
不滅の子どもよ！神の選ばれし者。  
あなたの眉に浮かぶ悲しみは、若々しい清らかさゆえに  
悲しい視線を作らず、その力で  
あなたの微笑みにある神々しい光の輝きを汚しもしない。  
だが、その面影は碎けて散った。あなたの明るい魂は行ってしまい、

あなたは死者の中で宵の明星として輝いている。

そして、あなたはあの子の遊び仲間で、その深い澄んだ瞳は  
何よりも青い空を映していた。

私たちは、自分たちの心から生まれた子どもとは、不運にも引き裂かれてしまい  
そのつぼみが花を広げるのを見ることができなかった。

今、あなたが行ってしまい、もうひとり愛しい犠牲者が  
黒い死へと向かった。死こそがこの日の当たる海岸を支配するのだ。

私の悲しみを分かちつ友よ！あなたの衰弱した身体は  
よく元気をなくしてしまわれていた。でも、その後あなたは身体を再びすくくと  
もたげて

健康の兆候を示しながら、良くない予兆をあざ笑っていた。

震える火花の変化を見つめながら

私は恐れと希望を抱いた。そしてついには思い切って

あなたの弱さこそが私の強さを支える要塞となるのだと思うことにした。

あなたは空から降りてきた精霊で

繋がれた鎖を解こうとあがいても、死ぬことができないと思われた。

そしてこんな風にも思われた。死という破滅は

あなたの内に燃える魂を身体から勝ち取る力もないと。

教えてほしい。汝ら、古代の城壁よ、雑草よ。古びて趣のある塔よ。

汝ら、ローマの空気よ。そして輝かんばかりに描かれた花々よ。

この奥まった所に彼の精神はやってこないのか、

愛が建てた場所、あの人が地上でまとっていた衣を安置する場所に。

もはやそんなことはない。そんなことはないのだ！たとえあの姿が飛んで行っ  
てしまったとしてもかまわない。

私の震える手で決してあなたのことを書いたりはしないだろう。あなたはもう  
死んでしまったのだから。

あなたは自然の中で生きている。愛よ、私の記憶よ、  
あなたを敬愛するという永遠の信念をもって  
もはや時の妻になどならない。私は永遠と結婚したのだから。

こうして私の精神が寄りかかっている過去のおかげで  
イタリアの光景は私の魂にとって最も大切に思われるのだ。  
トスカーナの平原では、風が花と糸杉から放たれた  
香気に浸かっていた。空がちょうど涙をこぼしたそのとき  
かつて最も大事だった者が、音楽の調べのように  
取り乱した声を私の耳に入れる。それは私の愛する者の声だ、  
そして、その者が私の記憶に見せるのは  
過去の光景だろう。過ぎ去りし喜び、過ぎ去りし希望が長い列をなす。  
あの人が立っていたセルキオの川岸、  
ピサの古い松林を映す水たまり、  
そして火。光は行ってしまふ。コノハズクの鳴き声。  
すべての息吹が彼の精神であり、決して死すことはない。  
こんな記憶が、この丘や洞穴を  
そして、この森の小道を、小川を、弔いの鐘のように物悲しい音を立てる波を  
私の胸にある悲しい鼓動ひとつひとつにしっかりと結び付け、  
それらの陰鬱な腕を私の安らぎの場にしたのだ。

さあ、小さな谷で暮らそう。  
たったの数か月前、そこは十分満たされていると思っていた。  
あのときひとつの夢が孤独を描き出していた、  
美しい森にある隠れ家の奥深くで。  
それからひとりの声が奇妙な予言をささやいた。  
伴侶を亡くした最愛の友人、あなたと私は

きっと日がな一日ともに過ごすだろう、と。

以前にラ・スペツィアの入り江で私たちがしてきたように。

### 3. テクストに対する注釈

#### 第1連目について

全訳7～8行目において「けれども、私は巡礼者として幾日間かとどまり、  
／父親を亡くした我が子に義務の鎖で繋がれている。」とある。ここで言う「我が子」とは、メアリとパーシーの間で最後にできた息子、パーシー・フロレンス(Percy Florence)を指す。パーシーの父親サー・ティモシー(Sir Timothy)の死後、爵位を継ぐことになる。このフロレンスはイタリアのフィレンツェ滞在中に生まれた子供であるため、フィレンツェ(英語読みでフロレンス[Florence])にちなんで名づけられた。また、メアリはジャーナルでも、パーシー・フロレンスに対して同様の記述をしている。例えば、メアリは1822年10月2日に、「我が子よ、あなたの運命はどうなるのかしら。あなただけが私をつなぎとめている。あなたは私を時へと繋ぐ唯一の鎖だ。(Oh my child – what is your fate to be? You alone keep me – you are the only chain that links me to time)」と言っている(*Journals* 433)。

#### 第2連目について

全訳下から1～2行目において「私をここから引き離さないで。ここに死ぬまで住まわせてください。／私を養女にした国、私の国、イタリアに。」とある。パーシーは1822年7月に友人エドワード・ウィリアムズ(Edward Williams)とともに、自家用ボートでリヴォルノへ向かう途中、嵐に遭い溺死する。打ち上げられた浜辺でパーシーの遺体は火葬されて、長男ウィリアムとともにローマで埋葬された。それゆえに、メアリとしてはイタリアを離れにくかったのだろう。しかし、メアリはジャーナルで1823年5月14日に「イタリアを

去ろうか。私のシェリーよ、あなたは私をここにとどめることはできないのだろうか。(Shall I leave Italy? – Can you not, my Shelley, keep me here?)」とイギリスへの帰国を検討している向きをにおわせ、最終的には8月にイギリスに帰国する (*Journals* 466)。メアリとパーシー・フロレンスはリー・ハントとその息子に伴われて、1823年7月25日にジェノアからロンドンへ向かうが、イングランドの帰国までに約1か月かかることになる。

### 第3連目について

全訳3行目において「私の初めての可愛い娘!」とある。この娘とは、第二子(長女)クララを指す。パーシーとメアリがイギリスのマーロウに居を構えていた1817年9月2日に生まれた娘である。

全訳4行目において「あの娘はヴェニスに近い、荒涼としたリドで葬られた。」とある。パーシーとメアリは1818年3月にイギリスからイタリアへ旅立つ。1818年4月にミラノ、トスカーナのリヴォルノ、フィレンツェ近郊のルッカへと移動する。1818年8月下旬、パーシーはヴェネツィアにいるバイロンを訪ね、バイロンはパーシーとメアリにエステの別荘を貸そうと提案する。パーシーはメアリ引越すように言うが、クララの体調が優れず、結局ヴェネツィアでクララは亡くなる。このときメアリとパーシーの夫婦仲が悪化する。

全訳5～6行目において「私の最愛の長男が、／そばを離れようとしなかった。」とある。この「私の最愛の長男」とは、1816年1月に生まれた長男ウィリアム(William)を指す。ウィリアムが生まれた時点でまだパーシーとメアリは正式に結婚していない。また、ウィリアムが生まれたのもイギリスである。1815年8月にパーシーはウィンザーにとどまるが、1816年5月にメアリ、クレアとともにパーシーはジュネーヴに向かい、1816年9月にロンドン帰国する。

全訳8行目において「王宮」とある。1815年8月からパーシーはビショップスゲート(Bishopsgate)近くにメアリとともに落ち着く。

全訳10～11行目において「わたしたちの仲間が速やかに海を渡って／アルプス山脈のそばに住んでいた。」とある。パーシーの友人バイロン卿 (Lord Byron) ことを言っているのだろう。1816年4月25日にバイロンはイングランドを出て、同年5月にパーシー、メアリ、クレア・クレアモントがジェノヴァへ向かう。このとき、パーシーとバイロンは邂逅し、メアリを含めて文学的交流が始まる。

全訳15行目において「セルキオ川」とあるが、この川はイタリアのトスカーナ地方を流れる三番目に長い川である。

全訳18行目において「エステンセ城」とあるが、これはイタリアのフェラーラ市にあるエステ家の居城である。

全訳19行目において「また、ポンペイのローマ市場を行き来する」とあるが、1819年4月にパーシーとメアリはローマに移る。同年6月にウィリアムは亡くなり、ローマで埋葬される。22行目以降でウィリアムの死に関する描写はこのあたりの事情を反映している。

\*テキストの底本は以下を採用した。

Shelley, Mary. "The Choice." *The Journals of Mary Shelley*. Eds. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1987. 490-94.

## Works Cited

Shelley, Mary. *The Journals of Mary Shelley*. Eds. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1987.